

動的家族画における被虐待児の描画特徴

—— 印象評定を用いた分析 ——

大和田 攝 子・阪 永 子

【問題と目的】

虐待を受け、児童養護施設に入所する子どもの数が増えるにつれ、虐待が及ぼす心理的影響や症状に関する多くの研究が報告されている。それに伴い、虐待を受けた子どもたちへの心理的援助として、プレイセラピーや箱庭療法、グループワークなどその実践報告も年々増えており、被虐待児への有効な援助の方策が模索されつつある。

虐待を受けた子どもたちへの援助を行う際にまず必要となるのは、子どもの心理的特徴を把握することである。特に、人格形成上きわめて重要な意味をもつ人生早期に、愛着を形成する場としての「家庭」、保護されるべき「家族」から虐待を受けた子どもたちが、加害者としての「家族」をどのように認知しているのかなど、被虐待児特有の世界の見方を知ることは臨床上大きな助けとなるだろう。

このような被虐待児における家族内の精神力動を把握する手がかりとして、Veltman & Browne (2000, 2001, 2003) は動的家族画 (Kinetic Family Drawing : KFD) が被虐待児のアセスメントに有効な手段となり得ることを示唆している。KFDとはBurns & Kaufman (1972) が確立した投影描画法であり、「あなたの家族全員が何かしているところ」という教示からも分かるように、描かれる人物像が行為・動作を伴うという点で従来の家族画とは大きく異なる。それゆえに、被験者のとらえた各家族成員が示す対人態度と、全体として彼の目に映る家族力動を読み取ることを可能にするのである (日比, 1986)。

一般児童と被虐待児のKFDを比較し、形式分析と内容分析を行った大和田・

阪（2004, 2005）は、被虐待児の描画特徴として、家族像の省略、食事場面の少なさや攻撃的内容の描写などいくつかの点を挙げている。しかし、このような形式的・内容的特徴だけでなく、「明るい」「和やかな」「不気味な」といった印象も、KFDの特徴を記述する上で重要な指標になると思われる。

対象のさまざまな印象や情緒的意味を測定する方法として、Osgood, Suci, & Tannenbaum（1957）が考案したsemantic differential法（以下、SD法とする）では、複数の形容詞対尺度が印象の測定に使用される。本研究では、まずKFDの印象を客観的に測定するために、SD法を用いた印象評定尺度を作成する。そして、これを用いて一般児童と被虐待児によって描かれたKFDの全体的印象を比較し、印象面における被虐待児の描画特徴を明らかにすることを目的とする。

【方法】

1. 描画の収集

(1) 作成者

印象評定の対象となるKFDを作成したのは、過去に虐待の被害を受け児童養護施設に入所している児童25名（男児15名、女児10名）と一般児童25名（男児10名、女児15名）の計50名である。対象児の基本的属性を表1に示す。対象児の性別は被虐待児群が男児15名（60.0%）、女児10名（40.0%）、一般児童群が男児10名（40.0%）、女児15名（60.0%）で、両群に有意な差は認められなかった。また、対象児の平均年齢は被虐待児群が10.5歳（SD=2.06）、一般児童群が9.7歳（SD=1.49）で両群に有意な差は認められなかった。被虐待児群における被害の内訳は、身体的虐待が11名（44.0%）、ネグレクトが13名（52.0%）、心理的虐待が4名（16.0%）であった。

表1 描画作成者の基本的属性

	被虐待児群 (n=25)		一般児童群 (n=25)		検定 ¹⁾
	Mean	SD	Mean	SD	
性別					ns
男	15	(60.0%)	10	(40.0%)	
女	10	(40.0%)	15	(60.0%)	
年齢	10.5	(2.06)	9.7	(1.49)	ns
虐待の種類 ²⁾					
身体的虐待	11	(44.0%)	—	—	—
ネグレクト	13	(52.0%)	—	—	—
性的虐待	0	(0.0%)	—	—	—
心理的虐待	4	(16.0%)	—	—	—

¹⁾ 性別は χ^2 検定、年齢は分散分析によって比較した。

²⁾ 一人で複数の種類の虐待を経験している場合もある。

(2) 材料

A4判の白い画用紙、HB鉛筆、消しゴムを人数分用意した。

(3) 手続き

被虐待児群はO市内、H県内、S県内の児童養護施設に入所中の児童59名を対象に描画の収集を行った。各施設とも描画の実施中は筆者および本学心理学科学生を含め約10名のスタッフが児童一人一人のそばに寄り添い、励ましたり質問に答えるなど可能な限り個別に対応した（個別法）。一方、一般児童群はS県内の公立小学校に通う児童103名を対象に、授業の一環として実施した（集団法）。

描画の教示は、いずれの場合もBurns&Kaufman（1972）に従い、「あなたも含めて、あなたの家族の人たちが何かしているところの絵を描いてください」とした。描画を終えた児童から順に、描画に描かれた人物（誰か・何をしているか）や描いた感想など、スタッフが個別に聞き取りを行った。

2. 描画の評定

描画の印象評定にはSD法を用いた。評定のための形容詞対は井上・小林（1985）や今村（2004）などを参考に、60対を収集した。筆者らを含む複数の臨床心理

士により選定を行った結果、35項目をKFD印象評定尺度（Kinetic Family Drawing Impression Scoring Scale）とした。

描画の評定は、投影描画法の経験を有し臨床歴30年以上のベテランの臨床心理士3名によって行われた。本研究では、描画の拒否やデータに不備のある児童などを除いた計136枚（被虐待児群50枚、一般児童群86枚）の描画の中から計50枚（被虐待児群25枚、一般児童群25枚）を無作為に抽出し、分析の対象とした。描画は被虐待児、一般児童といった属性が分からないようにランダムに配列され、「描画番号・年齢・性別」を印字した紙を描画に貼った。3名の評定者はそれぞれ50枚の描画に対して、7件法で印象評定を行った。

【結果】

1. KFD印象評定尺度の因子構造と信頼性の検討

評定された35項目について、因子分析（主成分解、バリマックス回転）を行ったところ、固有値1.0以上の基準で3因子が抽出された。因子の信頼性を著しく下げる項目を削除し、再度因子数を3に指定し因子解を求めた。その結果、最終的に3因子34項目が採用された。表2は、抽出された各因子とそれに含まれる項目、および因子負荷量、各因子の寄与率を示したものである。

第1因子は12項目から構成されており、「丁寧な」「まとまった」「バランスのよい」など全体的な安定感や統一性に関する項目に高い負荷がみられる。したがって、第1因子は「安定・統合性」と命名した。第2因子は11項目から構成されており、「動的な」「強い」「生き生きした」など活動性に関する項目や「感情のこもった」「表情のある」など感情表出に関する項目が多く含まれている。したがって、第2因子は「活動・表出性」と命名した。第3因子は11項目から構成されており、「くつろいだ」「和やかな」「親密な」など描かれた家族の親和・親密性に関する項目が多く含まれている。したがって、第3因子は「親密性」と命名した。

評定者別に各因子の α 係数を求めたところ、「安定・統合性」は.96～.98、「活動・表出性」は.85～.99、「親密性」は.97～.99であり、印象評定尺度として十分に高い信頼性が確認された。

表2 KFD印象評定尺度の因子分析結果

項目内容	因子負荷量		
	I	II	III
I. 安定・統合性			
21. 丁寧な — 粗雑な (※)	-0.80	-0.34	-0.23
15. まとまった — ばらばらな (※)	-0.74	-0.43	-0.24
14. 抽象的な — 具体的な	.73	.25	.27
19. 荒々しい — 繊細な	.71	.04	.44
34. バランスの悪い — バランスのよい	.71	.34	.43
26. 調和した — 不調和な (※)	-0.70	-0.34	-0.49
3. 現実的な — 空想的な (※)	-0.70	-0.15	-0.51
29. わかりにくい — わかりやすい	.69	.41	.46
18. 安定感のない — 安定感のある	.68	.51	.38
16. 不完全な — 完全な	.67	.49	.35
22. 攻撃的な — 攻撃的でない	.65	-0.02	.59
31. 落ち着きのない — 落ち着きのある	.64	.46	.35
II. 活動・表出性			
23. 動的な — 静的な (※)	.02	-0.81	-0.25
8. 弱い — 強い	.33	.80	.09
13. 情感のこもっていない — 情感のこもった	.27	.80	.19
12. 小さい — 大きい	.16	.80	.28
17. 生き生きした — 生氣のない (※)	-0.29	-0.76	-0.39
9. ストーリーのある — ストーリーのない (※)	-0.16	-0.73	-0.03
5. つまらない — 面白い	.40	.72	.34
11. にぎやかな — さびしい (※)	-0.25	-0.66	-0.60
24. 表情のない — 表情のある	.41	.63	.42
6. 閉鎖的な — 開放的な	.39	.60	.59
30. 豊かな — 貧弱な (※)	-0.52	-0.58	-0.52
III. 親密性			
2. 緊張した — くつろいだ	.38	.33	.75
4. 冷たい — あたたかい	.44	.44	.74
1. 明るい — 暗い (※)	-0.42	-0.45	-0.70
27. 不気味な — 不気味でない	.57	.24	.69
25. 楽しい — 苦しい (※)	-0.46	-0.42	-0.67
10. 和やかな — 和やかでない (※)	-0.57	-0.37	-0.67
35. 穏やかな — 激しい (※)	-0.63	-0.05	-0.67
33. 親しみやすい — 親しみにくい (※)	-0.57	-0.42	-0.63
28. 空虚な — 充実した	.53	.48	.61
20. 親密な — 親密でない (※)	-0.49	-0.40	-0.60
32. のびのびした — 窮屈な (※)	-0.37	-0.52	-0.59
固有値	9.79	8.92	8.52
寄与率(%)	28.79	26.23	25.05
累積寄与率(%)	28.79	55.03	80.08

(※) は逆転項目

2. 被虐待児群と一般児童群の比較

各項目の評定値は、3人の評定者による評定値の平均値とした。各因子の評定値の合計を項目数で除した値を群別に算出し、被虐待児群と一般児童群の描画印象を比較した。表3は各因子における群別平均値および標準偏差を示したものである。各因子の評定値は、得点が高いほど「安定・統合性」「活動・表出性」「親密性」が高いということを示している。

t検定の結果、「安定・統合性」「活動・表出性」「親密性」のすべての因子において、一般児童群の方が被虐待児群よりも評定値が有意に高いことが示された。

表3 各因子の群別平均値および標準偏差

	一般児童群	被虐待児群	t 値
	平均値 (SD)	平均値 (SD)	
安定・統合性	5.18 (0.91)	3.25 (1.18)	11.19***
活動・表出性	5.03 (1.07)	3.36 (1.24)	8.80***
親密性	5.28 (1.05)	2.95 (1.17)	12.86***

***p<.001

3. 各描画のパターン別分類

それぞれの因子が意味する印象が、実際にどのような描画に基づいているのかを検討するため、各描画をパターン別に分類した。各因子の平均値を基準に、それより得点が高い描画を高群、得点が高い描画を低群とした。各因子が高群・低群のいずれかに分けられることから、理論上は $2^3=8$ 通りのパターンに分類されることになる。これらの方法により描画を分類した結果、計6通りのパターンが見られた。パターン別の人数を表4に示す。

一般児童群で最も多かったのは、「高安定・統合性」「高活動・表出性」「高親密性」の18枚で、全体の7割以上を占めていた。一方、被虐待児群では「低安定・統合性」「低活動・表出性」「低親密性」が19枚 (76.0%) と最も多かった。

表4 各描画のパターン別分類

安定・統合性	高	高	高	低	低	低
活動・表出性	高	低	低	高	高	低
親密性	高	高	低	高	低	低
一般児童群 (%)	18 (72.0)	3 (12.0)	2 (8.0)	1 (4.0)	0 (0.0)	1 (4.0)
被虐待児群 (%)	3 (12.0)	0 (0.0)	1 (4.0)	0 (0.0)	2 (8.0)	19 (76.0)

ここで、各描画パターンの例を描画1～6に示す。なお、それぞれの描画パターンにおいて、一般児童群の方が出現率が高いものは一般児童群の描画を提示し、被虐待児群の方が出現率が高いものは被虐待児群の描画を提示した。

描画1 「高安定・統合性」「高活動・表出性」「高親密性」の例

作成者は一般児童の11歳女児である。家族全員が決まった席で食事をしている。表情が豊かであり、食卓の描写にも臨場感がある。現代家族にふさわしくテレビが描かれているが、対話中心の食卓風景である。

描画2 「高安定・統合性」「低活動・表出性」「高親密性」の例

作成者は一般児童の11歳男児である。家族が集まって食事をしている場面が描かれているが、どの人物像も画一的であり動きが感じられない。

描画3 「高安定・統合性」「低活動・表出性」「低親密性」の例

作成者は一般児童の11歳男児である。家族そろって野球の番組を見ているが、全員後ろ向きで顔が描かれていない。

描画4 「低安定・統合性」「高活動・表出性」「高親密性」の例

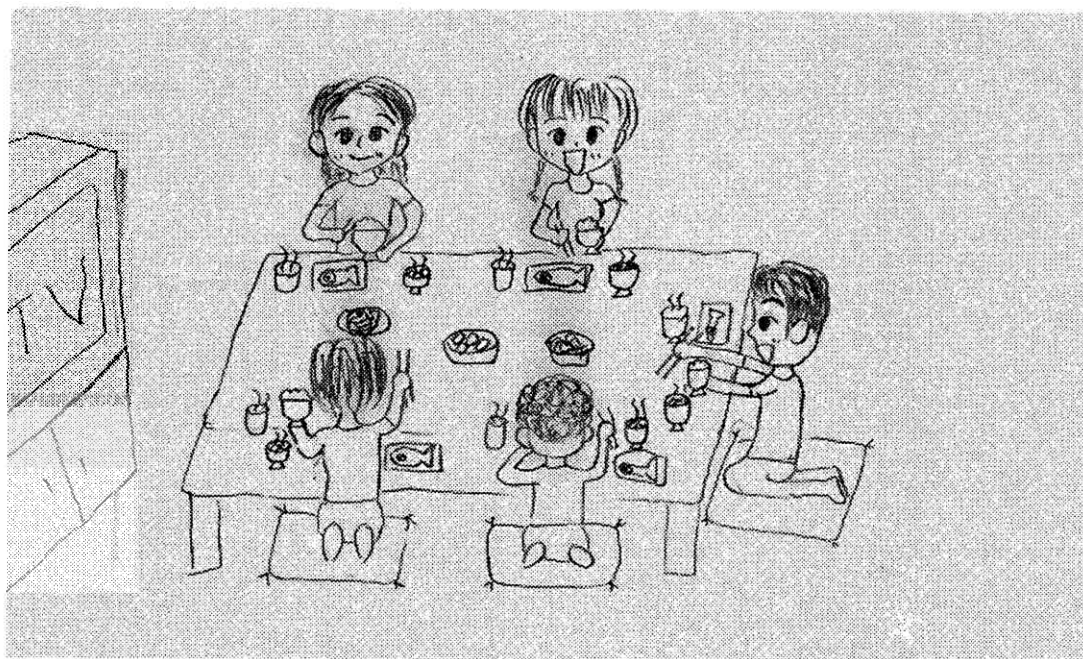
作成者は一般児童の9歳男児である。粗雑なタッチではあるが、躍動感があり楽しい雰囲気 of 描画である。調理をしている母親の横で電子レンジの音が鳴り、食卓では料理ができるのを待つ光景がよく表されている。

描画5 「低安定・統合性」「高活動・表出性」「低親密性」の例

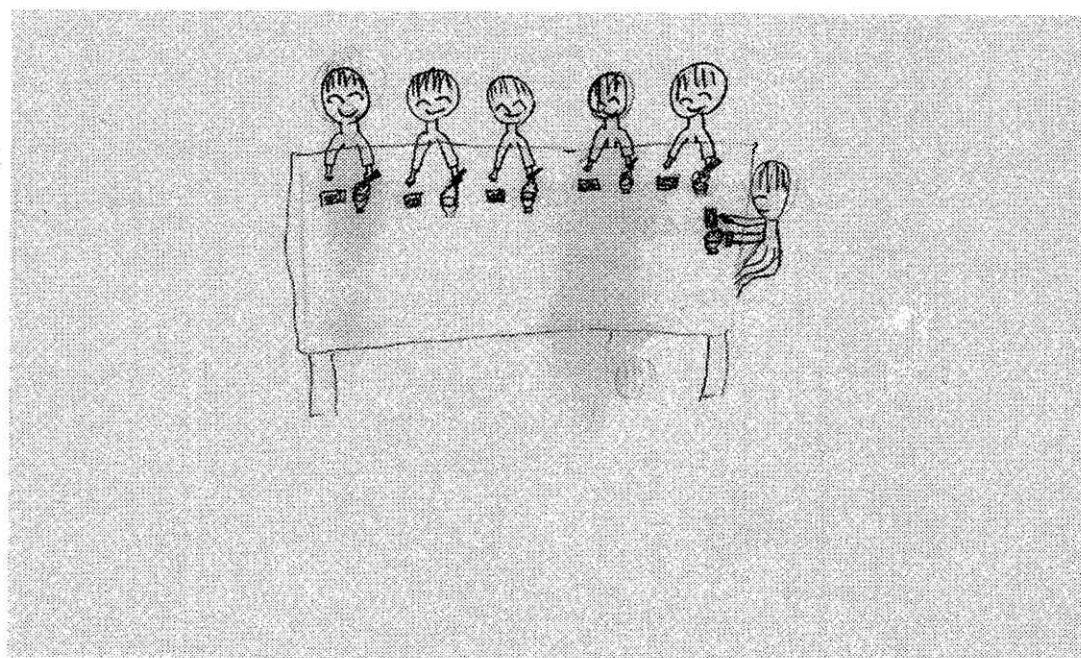
作成者は被虐待児（身体的虐待、ネグレクト、心理的虐待）の14歳男児である。「ドラえもん」のキャラクターを登場させて、家族の惨劇を戯画化するなどの一種の加工が用いられている。攻撃的でグロテスクな描画である。

描画6 「低安定・統合性」「低活動・表出性」「低親密性」の例

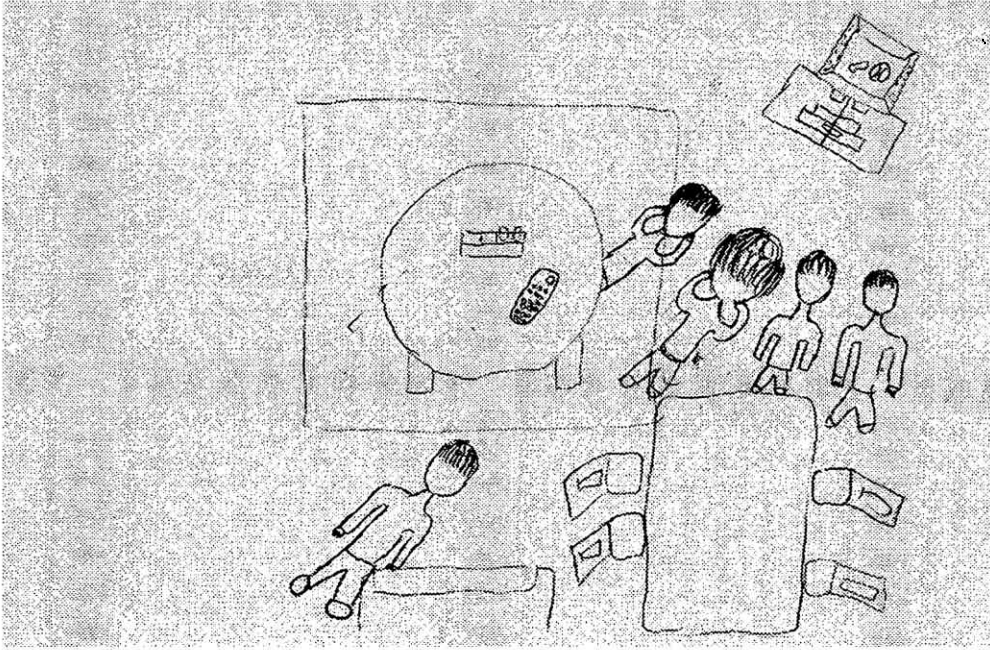
作成者は被虐待児（心理的虐待）の10歳男児である。ソファに描かれている人物像は、一番左から自分、兄、弟、姉、父親、母親の順で、本児は両親から一番離れた場所にいる。テレビが詳細に描かれているが、人物像はすべて後ろ向きで顔がなく棒状に描かれている。極めて貧弱な描画である。



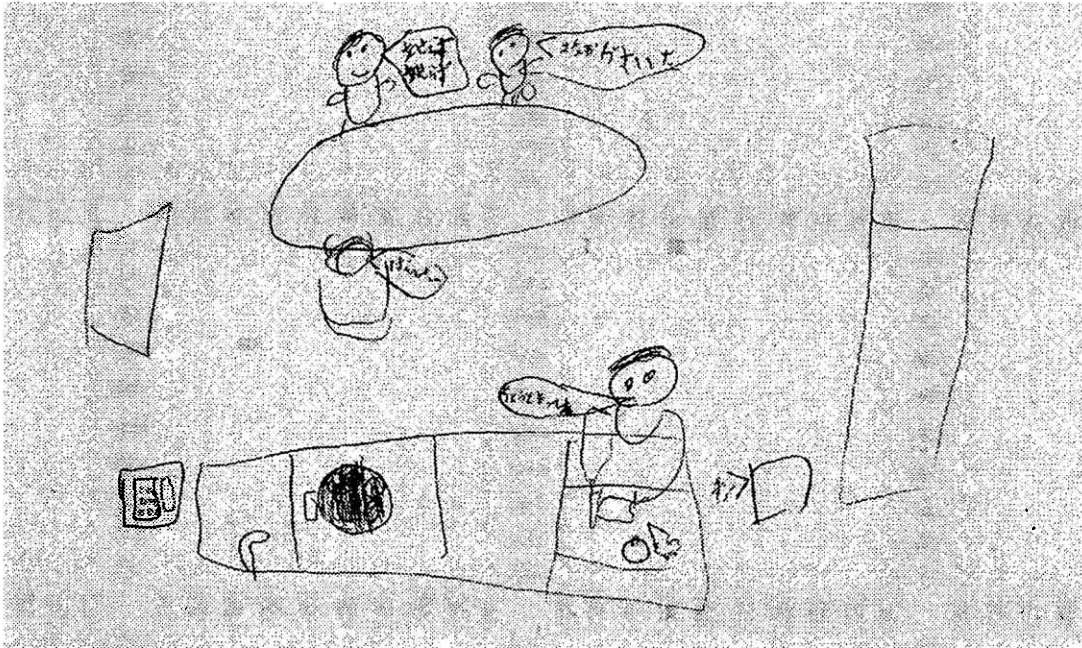
描画 1



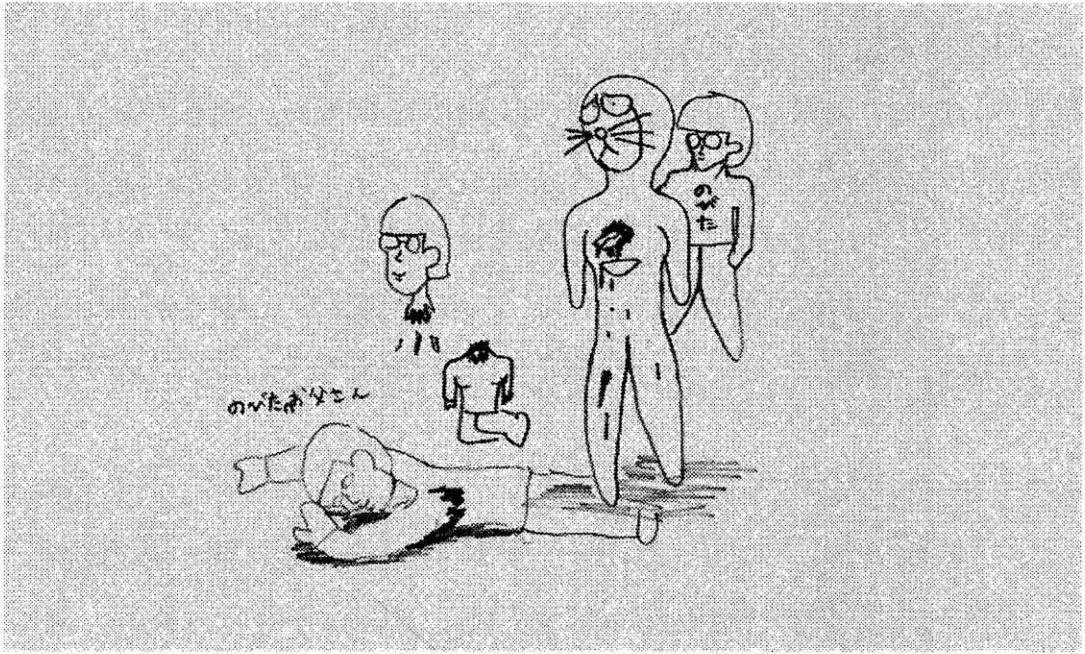
描画 2



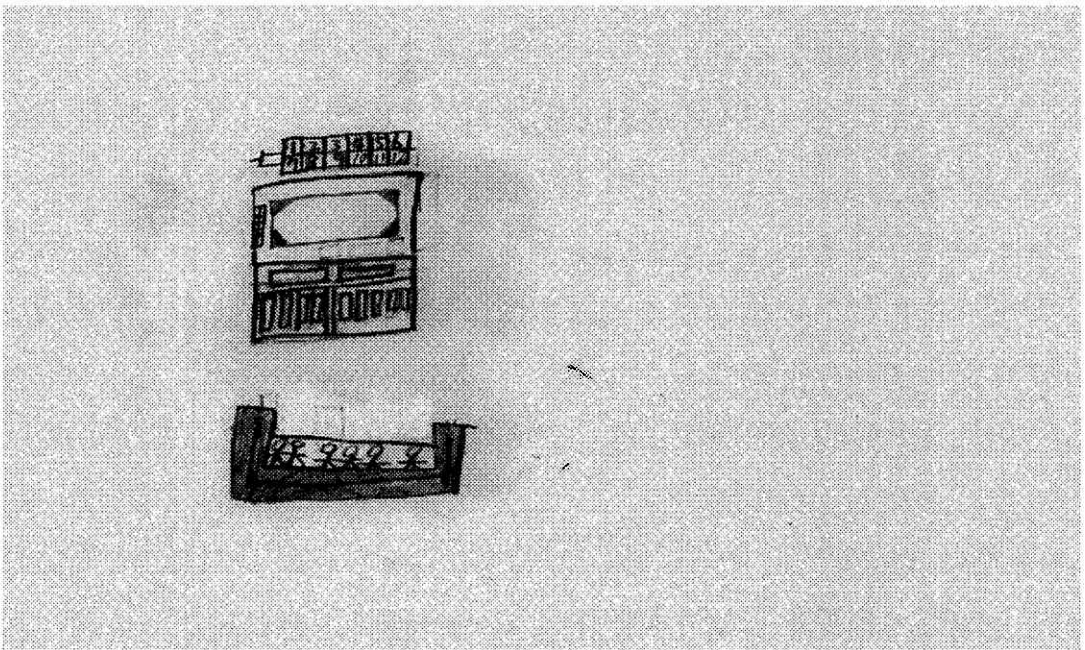
描画 3



描画 4



描画 5



描画 6

【考察】

1. KFD印象評定尺度の因子構造

本研究の目的は、KFDの印象を評定する尺度を作成し、被虐待児が描くKFDの印象面における特徴を明らかにすることであった。まず、評定のための形容詞対を収集し、35項目からなるKFD印象評定尺度を作成した上で、50枚の描画に対して3名の評定者が評定を行った。主成分分析の結果、「安定・統合性」「活動・表出性」「親密性」の3つの因子から構成されていることが明らかになった。

「安定・統合性」は「丁寧な」「まとまった」「バランスのよい」などの項目を中心に、「具体的な」「わかりやすい」といった具体性に関する項目も含まれており、全体的な安定感や統一性に関する因子であると考えられる。次に、「活動・表出性」は「動的な」「強い」「生き生きした」など活動性に関する項目と同時に、「情感のこもった」「表情のある」など感情表出に関する項目から構成されており、活動性や表出性に関する因子であると考えられる。最後の「親密性」は「くつろいだ」「和やかな」「親密な」といった描かれた家族の親密性を示す項目を中心に、「親しみやすい」など親和性に関する項目も含まれていることから、親密性や親和性に関する因子であると考えられる。

今村（2004）はコラージュ作品の印象評定尺度を作成し、「安定性」「表出性」「創造性」の3因子を見出している。「安定性」は「落ち着きのある」「安定感のある」など全体的なまとまりや落ち着きを表す因子となっており、本研究における「安定・統合性」に相当すると思われる。しかし、今村の「安定性」に含まれている柔らかさや女性らしさを示す項目は、本研究の「安定・統合性」にはない。また、今村の「表出性」は「地味な（逆転項目）」「にぎやかな」「色数の多い」などの項目から構成されているが、本研究における「活動・表出性」は、「あなたの家族全員が何かしているところ」という教示が示しているように描かれた人物像の動作や表情など動的な様相が項目内容に反映されており、今村のそれとは意味合いが多少異なる。さらに、本研究の「親密性」に含まれる項目は今村の尺度にはほとんどないことから、家族の力動が投影されるKFDに

においては、全体的な印象を評定するのに必要な要素として認識されたのかもしれない。

2. 印象評定における被虐待児の描画特徴

次に、本研究で作成した印象評定尺度を用いて被虐待児と一般児童の描画印象を比較した。その結果、「安定・統合性」「活動・表出性」「親密性」のすべての因子において、一般児童と被虐待児の評定値に有意な差が認められた。すなわち、被虐待児が描くKFDは一般児童のKFDに比べ、「全体的に安定感やまとまりがなく、躍動感や情緒的表現に乏しく、また描かれた家族像からは親密で和やかな雰囲気を感じられない」という特徴をもつといえよう。

しかしながら、すべての被虐待児の描画が3つの因子において平均値よりも低い値を示すわけではない。各描画のパターン別分類を見ると、一般児童にもっとも多い「高安定・統合性」「高活動・表出性」「高親密性」に分類された被虐待児の描画は、全体の約1割を占めていた。本研究において対象となった被虐待児はすべて児童養護施設に入所中の児童であるが、虐待の程度や種類、虐待が行われた時期、さらに児童の脆弱性などによって、KFDの印象が異なる可能性がある。また、彼らは施設においてプレイセラピーやグループワークなどの心理的援助を受けているが、それらの治療的介入が描画表現に何らかの影響を及ぼしているのかもしれない。

なお、描画1～6は各描画パターンの代表例を提示したものである。これらの描画を提示することで、安定感や統一性、活動性や表出性、親密性や親和性などの印象が、実際にどのような描画に基づいているのかを確認することが可能となる。また、それと同時に「高安定・統合性」「高活動・表出性」「高親密性」や「低安定・統合性」「低活動・表出性」「低親密性」など、3つの因子の組み合わせによって表現される全体的印象をも視覚的に捉えることができるだろう。

3. 今後の展望

本研究では独自にKFD印象評定尺度を作成し、被虐待児の描画印象について

探索的に検討を行った。今後さらに多くの描画を評定することで、尺度の信頼性を確認するとともに、KFDの形式・内容的特徴と「安定・統合性」「活動・表出性」「親密性」といった印象傾向との関係についても明らかにすることが必要である。さらに、先述したように、対象児の性別や年齢、虐待の程度や種類、虐待が行われた時期など、さまざまな要因によって描画の印象が異なる可能性がある。したがって、対象児の個人的要因も考慮に入れた詳細な比較検討が必要となろう。

【文献】

- Burns, R.C. & Kaufman, S.H. 1972 *Actions, Styles, Symbols in Kinetic Family Drawings (KFD) : An Interpretive Manual*. 加藤孝正・伊倉日出一・久保義和（訳）1998 描画心理学双書②子どもの家族画診断 黎明書房
- 日比裕泰 1986 動的家族描画法（K-F-D）－家族画による人格理解－ ナカニシヤ出版
- 今村友木子 2004 印象評定を用いた統合失調症者のコラージュ表現の分析 心理臨床学研究, 22（3）, 217-227.
- 井上正明・小林利宣 1985 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観 教育心理学研究, 33, 253-260.
- Osgood, C.E., Suci, G.J., & Tannenbaum, P.H. 1957 *The measurement of meaning*. Urbana, IL: University of Illinois Press.
- 大和田攝子・阪永子 2004 KFD（動的家族画）に見られる被虐待児の特徴 神戸松蔭女子学院大学・神戸松蔭女子学院短期大学 研究紀要, 45, 1-14.
- 大和田攝子・阪永子 2005 被虐待児の動的家族画（KFD）に関する数量的検討－描画の様式、象徴および家族の力動性を中心に－ 神戸松蔭女子学院大学・神戸松蔭女子学院短期大学 研究紀要, 46, 1-15.
- Veltman, M.W.M. & Browne, K.D. 2000 Pictures in the classroom : Can teachers and mental health professionals identify maltreated children's drawings? *Child Abuse Review*, 9 (5) , 328-336.

- Veltman, M.W.M.& Browne, K.D. 2001 Identifying childhood abuse through favorite kind of day and kinetic family drawings. *Arts in Psychotherapy*, 28 (4) , 251-259.
- Veltman, M.W.M.& Browne, K.D. 2003 Trained rater's evaluation of Kinetic Family Drawings of physically abused children. *Arts in Psychotherapy*, 30 (1) , 3-12.